大林太良の物質文化研究

── その動機と背景の検討 ──

角南　聡一郎*

大林太良は神話研究の分野で、傑出した業績を残した民族学者／文化人類学者として知られる。しかしながら、大林の研究テーマの一つに物質文化研究があったことはあまり知られていない。その業績を見れば、大林の物質文化研究とは、その多くが考古資料に対するものであったが、民族資料についても考古資料との関連で検討をおこなっていることがわかる。無形である神話の研究と物質文化研究とは、大林の中でどのような連関を有していたかという問題について、大林の残した論考や対談、大林の弟子たちの発言などを手がかりとして、この問題について検討をおこなった。

大林太良が物質文化研究を実践した動機は、神話研究を相互補完するためであったといえよう。両者は、型式分類をおこないそれらの分布を図示して示すことにより、地域間での比較検討が可能となる。そのことに早くから大林は気づいていた。それは、ドイツ留学時にフロベニウスの研究に触発され、神話・説話に関する分布図を武器として使用した。フロベニウスは物質文化（民族資料）の分布図も用いて研究をおこなった。このことは間接的に大林にも影響を与えたと考えられる。

キーワード

大林太良、物質文化研究、神話研究、分布図、学説史

目次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　大林による物質文化研究概観
Ⅲ　物質文化と神話の関係
Ⅳ　分布図を考える
Ⅴ　おわりに

Ⅰ　はじめに

大林太良（1929～2001）は神話研究の分野で、傑出した業績を残した民族学者／文化人類学者として知られる。しかしながら、大林の研究テーマの一つに物質文化研究があったことはあまり知られていない（山田 2007）。その業績を見れば、大林の物質文化研究とは、その多くが考古資料に対するものであったが、民族資料についても考古資料との関連で検討をおこなっていることがわかる。無形である神話の研究と物質文化研究とは、大林の中でどのような連関を有していたのだろう。ここでは大林の残した論考や対談、大林の弟子たちの発言などを手がかりとして、この問題について考えてみたい。

神話及び物質文化（そのもの）の研究は、民族学において重要な位置を占めていた。ところが、民族学が文化人類学と呼ばれるようになった頃から、次第に隅へと追いやられていった。そして現在では、これらを

* 神奈川大学

研究する研究者の数は極めて少ない。そのような状況となった要因は、ヒト、モノ、情報の流通が盛んになったという社会変化だと言えようが、神話や物質文化を研究することが無意味となった訳ではない。このような時代だからこそ、古典的なテーマである二つの資料をもって、広く世界を考えるということは意義あるものではなかろうか。その先人の一人である大林の研究の歩みを元に、物質文化研究をおこなうことの意味を問うてみたい。

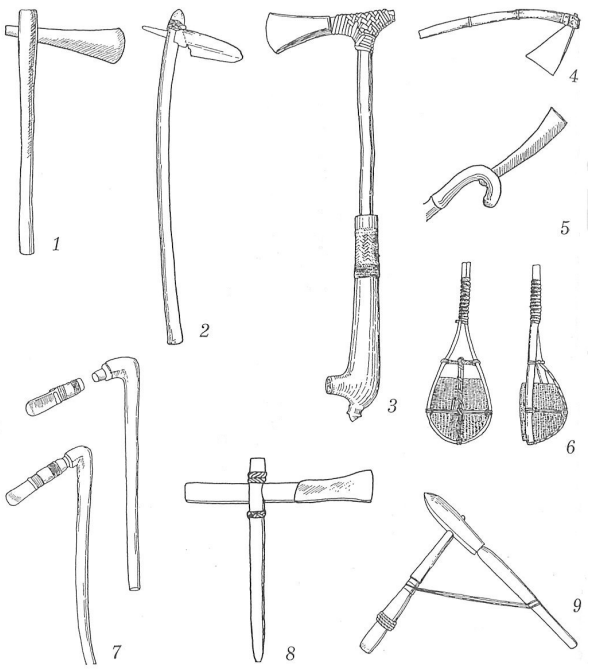
II　大林による物質文化研究概観

これまでも、大林について語られる、回顧されることはあった（有馬 1979、高谷 2003、秋道 2001、横山 2001、佐々木・クライナー・秋道・小長谷 2007）。しかしながら、大林の物質文化研究について明確に言及しているのは、後藤明くらいである（後藤 2007）。

大林は意外なことに東京大学文学部考古学研究室の学生向けに、東南アジア考古学を講じていた（後藤 2006）。

大林がはじめて物質文化研究を試みたのは、『民族学研究』21–4に掲載された「アイヌ家屋の系統に関する一試論—ketun-niについて—」であった（大林 1957）。ここで大林は、アイヌ家屋の原始形態の系統を、広く北方ユーラシアの事例と比較しながら検討を試みた。本研究で採用された方法は、事例の類型化と各事例の分布である。それはまさに大林の神話研究で用いられた方法である。神話と物質文化、双方の研究方法の共通性は現在では看過されているように見える。

その後、大林は断続的ながらも、生涯にわたって物質文化研究をおこなった。大林は物質文化研究を一般民族学の一部として興味を抱いた。大林が物質文化に関心を持ったのは、問題の物質文化的要素ないし技術の文化史上の位置付けからであった（大林 1972）。物質文化への関心が深まった背景には、保谷の民族学博物館の構内にアイヌ民家が建てられ、それを見学した際に、知里真志保（1909～1961）から説明を聞いたことがある。今一つは、民族学／考古学の分野で業績を残した鹿野忠雄（1906～？）の『東南亜細亜民族学先史学研究』（鹿野 1946、鹿野 1952）を読んだことである（大林 1972）。鹿野はよく知られるように台湾を中心とした東南アジアをフィールドとし、地理学から出発し、民族学を経て考古学に到達した研究者である。



柄の着柄例
1. 貫入式：Angami Naga 族斧（merr または sidure）（HUTTON）
2. 貫入式：Batak 族鍬（RATZEL）
3. 膝折式：Sarawak 斧（HOSE and MacDOUGALL）
4. 貫入式：Purum 族小鍬（atu）（DAS）
5. 貫入式：Cil 族山刀（東南インドシナ）（DAM BO）
6. 箍　式：Kayan 族石槌（HOSE and MacDOUGALL）
7. 扉柄つき膝折式：Engano 島斧（MODIGLIANI）
8. 扉柄つき袋穂貫入式：Akha 族斧（BERNATZIK）
9. 貫入式：ニューギニア，Humboldt 湾サゴ椰子髄叩き具（Ceram 島西部も同形式）（MARTIN）

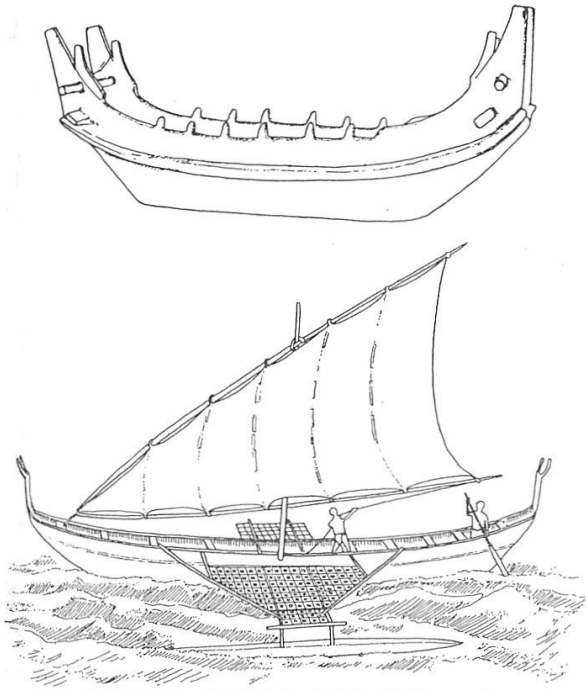
図１　柄の着柄例（大林 1969）

大林が1960年代末から1970年代初頭にかけて、集中的に物質文化関連の論考を発表したのは、アチック同人で民具という形での物質文化研究に重要な役割を果たした、民俗学者／民族学者・宮本馨太郎（1911～1979）が主宰していた、『物質文化』であった。大林は自身の研究が「物質文化に寄った時期の一つは、1968～1970年ごろ」であったと回述している（大林 1972）。これらの論考には、大林の考古資料と民族資料に対する考えが断片的に示されている。

「東南アジアにおける斧の着柄法」では東南アジアにおける民族資料の斧について、着柄方法を分類しているが、冒頭で以下のように述べている（大林 1969: 30、図１）。

> 東南アジアにおける斧の着柄法については、オセアニアについてHINDERLINGの研究のような、まとまった研究はまだ公にされていない。この空隙を埋め、諸形式の分布を確定し、かつ諸形式の相対年代と文化的帰属についての見通しを与えるのが本稿の目的である。

また、「西都原埴輪舟と海外の類例」では、宮崎県



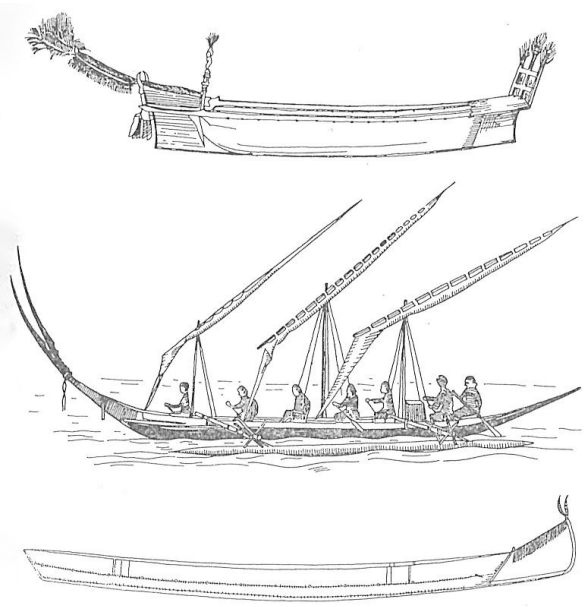
第１図　上：西都原出土の埴輪舟（後藤による）
下：Mortlock島の舟（RATZEL による）

図２　西都原埴輪舟と海外の民族例（大林 1970）

西都原古墳出土の舟形埴輪をめぐって、これと類似する世界各地の民族資料例を示しながら、次のように説いている（大林 1970: 13、図２～４）。

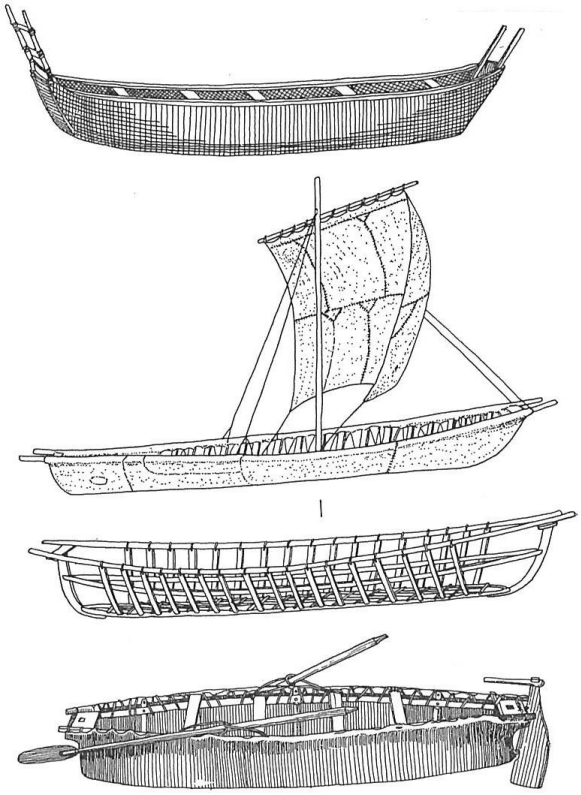
以上が現在まで管見に入ったＶ字形船首飾の分布である。果たして、これらの事例すべてを同一に系統と見なしてよいか否かは、さらに検討を要するが（たとえば東アフリカの事例）、東南アジアでは高文化の中心地帯には見られず、僻地に見出され、さらにオセアニアでは、インドネシアからの比較的新らしい文化潮流の影響が顕著なソロモン諸島とかミクロネシアの一部に見出されることは注目に値する。

これらのことより、大林の物質文化研究は、物質文化諸型式の分布とそれらの比較研究に重点が置かれていることがわかる。また、一連の論考がアチックの物質文化研究の流れを汲む、『物質文化』誌上に掲載されたことは意義深い。それは民具資料を考古資料と関連付けて研究する視点である。アチックでは当初、考古資料も包括した物質文化研究が志向されたが、日本常民文化研究所となってからは、その存在の影は薄くなっていた。そういった状況からすれば、大林の物質文化研究は、アチックの物質文化研究への原点回帰ともとれる。



第２図　上：Batak 族の軍舟（KRAEMER による）
中：Nicobar 島の舟（KRAEMER による）
下：Waganda 族の舟（WEULE による）

図３　海外の民族例１（大林 1970）



第３図　上：東シベリアの Bidara 舟（NEVERMANN による）
中：Chukchee 族の Umiak 型皮舟（BYHAN による）
下：中央 Eskimo の Umiak（BYHAN による）

図４　海外の民族例２（大林 1970）

1973年11月の小説家・松本清張（1909～1992）、東洋史学学者／考古学者・江上波夫（1906～2002）とのベトナム訪問では、大林によれば民族学だけでなく考古学方面でも多くの収穫があったという。大林は「北

ベトナム考古学界には、自生的な文化発展を強調する傾向と、伝説的歴史の結びつきに対して肯定的な立場が顕著に見られる」としている（大林 1974）。このようなスタンスは大林の中で有形と無形を関連付けるヒントとなったのだろう。その後、コーカサス地方の遺跡と巨人神話との関係を論じるなど、考古資料と神話の相互関係への着目へと展開されていった（大林 1976 a）。

大林は考古学者・森浩一（1928～2013）、歴史学者・上田正昭（1927～2016）と、社会思想社刊行『日本古代文化の探究』（1974～1984）シリーズでそれぞれ執筆を分担し編者となっている。また森とは小学館刊行『日本民俗文化大系』（1983～1986）でも編集、執筆による協業をおこなっている。このように大林は考古学者などの異分野の研究者と共に仕事をすることが多かった。ここからは、大林と考古学の近しい関係が観取される。それは物質文化という共通テーマで議論することができたからだろう。

『鍋と帽子と成人式―生活文化の発生―』（リップス 1988）は、ドイツ出身で、アメリカでも調査研究をおこなった、民族学者・リップス（Lips, Julius E. 1895～1950）が1949年に英文で著した、The Origin of Things の翻訳である。大林によれば、リップスの民族学上の立場は、文化史的民族学の流れに属し、ことにグレープナーから強い影響を受けている（大林 1988a）。リップスは、1925年にグレープナーからケルンのラウテンシュトラウフ・ヨースト民族学博物館に招かれ、後にグレープナーが退官すると、リップスはケルン民族学博物館館長とケルン大学の民族学教授に任ぜられた。本書はリップスがナチに抵抗しアメリカに亡命した時に記された。

大林は「第二版あとがき」で以下のように追憶している（大林 1988b）。

> この本の旧版が出てから、もう二十四年もたつ。早いものだ。今年に入ってから六月二十四日に、原著者の未亡人のエヴァ・リップス教授もライプチッヒで亡くなった。文化圏説の空気を吸っていた人は、ドイツ・オーストリアの学界ではもうほとんど残っていない。この本にみられるような学問的関心をもつ民族学者は、ドイツ語圏でも多くはない。
>
> このような世の移り変わりにも拘らず、旧版への要求が絶えず、新版発行の運びになったのは民族学（文化人類学）の本は近年数多く我が国でも出版されているとは言え、やはり物質文化や技術に関する適当な本がないことが重要な理由だろう。（中略）だがこの本の価値は、単に物質文化や技術に詳しいというだけではない。広い学識、豊富なデータの面白さ、楽しく読める文体、そして人間と文化への深い理解が、この本に独特の魅力を与えている。

ここでは大林により、物質文化研究には十分な魅力があるが、次の世代の研究者が育っていないことへの嘆きともとれることばが添えられている。

大林による物質文化研究は、彼の著作によれば以下の様な 4 つのカテゴリーに類別できる。①民族学／文化人類学的立場からの物質文化研究、②考古資料の研究、③考古資料を民族学的に検討する研究、④神話と考古資料の関係についての研究。①は同時代の物質文化にスポットを当てたもので、②は純粋に考古資料を検討したものである[1]。

大林が魅力を感じていたように、物質文化に着目することは、民族学に隣接する学問、考古学、民俗学、建築学などと共通の対象やテーマを有し接点を共有することを可能とする。大林は無形文化を論じるには有形文化が、逆に有形を検討するには無形文化が不可欠であることを熟知しており、有形と無形を同様の方法で研究することにより、相互補完を可能なものとしていった。大林の物質文化研究を再検討することで、民族学／文化人類学における物質文化研究の可能性と問題点を、見出すことができるのではなかろうか。

Ⅲ　物質文化と神話の関係

物質文化研究の中で議論の対象とされる問題系の一つに起源論がある。その物質文化のたどってきた歴史が長ければ長いほど、起源論は物質文化のみならず、人の移動、形質、言語など人そのものに関する伝播論と深く結びつく。こうした古い時代の物質文化に関する起源論に着目するのは、考古学である。一方、同様に起源や伝播に強い関心を寄せてきたのは、神話研究である。神話の起源や伝播は人の移動や文化の伝播を

1　大林が考古学研究に直接影響を与えたのは、「縄文集落論」であったと考えられるが、直接考古資料などの物質文化を取り扱ったものではないため、本稿では言及しない。

説明することができるからである。これらは相互補完的な役割を果たすことが多い。つまり、考古学と民族学の黎明期において、二つの学問はまさに隣接学問として、近しい関係にあったといえる。しかしながら日中戦争以降、神話研究・考古学は日本の帝国主義へと援用されることとなる。戦後はその反省により、考古学者は物質文化と神話も含む説話伝承とを、安易に結びつけることに対して慎重な態度をとってきた。戦後、民俗学者・柳田國男（1875～1962）の『海上の道』で示した南方から稲作がもたらされたとする説に対して、考古学者は物証に乏しいと批判的な態度をとったことをみればわかりやすいだろう。

我が国で実質的に物質文化研究がスタートする契機となったのは、1922年の渋沢敬三（1896～1963）によるアチック・ミューゼアムの開設であろう。この頃から1980年代初頭までは、日本の民族学や文化人類学では伝播主義の系譜を引く研究が盛んであった。その影響は民族学だけでなく、民俗学や考古学、歴史学にも及んでいた。このような方法が日本の民族学あるいは文化人類学で大きな比重を占めるに至ったのは、岡正雄（1898～1982）や石田英一郎（1903～1968）といった戦後日本のこの分野を支えた研究者が、戦前ウィーン大学に留学し、文化圏説を主導したシュミット（Schmidt, Wilhelm 1868～1954）やコッパース（Koppers, Wilhelm 1886～1961）らに師事してドイツ、オーストリア流の民族学を修得してきたことが影響している（佐々木 2011: 4）。シュミットは1935年に来日した際に、アチックを訪問し渋沢とも会っている。日本の物質文化研究、ことにアチックにおいては、渋沢が1934年の日本民族学会設立と深く関係したことからみても、ドイツ、オーストリア流の民族学の影響がかなり大きいといえる。

戦後の民族学あるいは文化人類学の中で、岡、石田らの研究が、次世代の研究者たちに与えた影響は計り知れないものがある。岡は、ドイツ・オーストリアの歴史民族学の理論を活用し、戦後の若い民族学者に対して、神話研究の方法論的提唱と日本民族起源論についての構想を通じて、大きな刺激を与えた（牛島 1972）。岡と石田はいずれも神話研究において考古資料を用いていることが特徴である。岡はウィーン留学時、民族学者／考古学者・ハイネ＝ゲルデルン（Robert Heine-Geldern 1885～1968）からかなりの影響を受けたという（クライナー 1979）。大林は岡や石田の影響のもと、1955年にフランクフルト大学、1956年にはウィーン大学に留学している。岡の影響は、大林が神話研究とともに考古学や物質文化研究を意識したことにも認められる。

民族学者・松本信広（1897～1981）は1924～1928年パリ大学に留学し、ソルボンヌ高等研究院でM.モース（Mauss, Marcel 1872～1950）に師事している。松本も神話研究と考古学研究を並行して実践した研究者であった。しかしながら、神話研究と考古学研究は次第に個別の研究者によってなされるようになる。それは、神話学者・三品彰英（1902～1971）の研究スタイルに顕著に表れている。三品自身は考古学、考古学者とは親しく交わりながらも、考古資料そのものを扱った研究はしなかった。その理由の一つとして考えられるのは、海外留学経験である。三品の師、西田直二郎（1886～1964）は1920年代にヨーロッパへと留学し、民族学や文化人類学の影響を受けつつ独自の文化史学を形成した。しかしながら三品自身は、欧米に留学することはなかった。このような三品の遍歴を知った上で、三品の晩年の神話と考古学との関連についての発言を、大林の捉え方と比較しながらみておきたい。

考古学者・末永雅雄（1897～1991）、三品、歴史学者・横田健一（1916～2012）の対談をまとめた『神話と考古学の間』が、神話と考古学の関係を知るのに有用である。本書中で、横田によれば、マージンエリアを神話の分野でいち早く開拓したのは、三品と松本信広であったという（末永・三品・横田 1973: 4）。さらに、三品は神話と考古学との関係について、自らの考えを以下のように語っている（末永・三品・横田 1973: 5）。

> 文化のアスペクト（側面）から見ますと、考古学の対象は物的遺物や遺跡です。もちろんその背後には精神的なものがあるのですが、学問の対象としては物的遺物です。一方、神話は精神的な無形のものです。そういう意味で、学問としてのアスペクトが違う、というか、扱う資料が違っています。
>
> もちろん「両者は、隣接地帯として職分的にはからみ合っている。だから弥生式時代の神話と弥生式時代の考古学的遺物とは、やはり一つのものである」と、理論的には言えます。けれど、実際に考古学のどこと、神話学のどことが、どうつながるかということになると、これは非常にむずかしい。文化の構造の違いという問題が根本にあるのです。

これに対して大林は、神話学者・吉田敦彦（1934〜）との対談の中で、神話と考古学、物質文化の関係について以下のように述べている（大林・吉田 1998: 14–15, 43–44）。

もう一つ、神話にしても何にしても、「話」というのはいくつかの部分を構成することで、一つの全体として成り立ちます。そういう「話」は考古学的に遺物としては残りませんが、同じ原理、つまり複数の構成要素を一つのものとして機能させるというのは、物質文化のほうに手掛かりがあるわけです。例えば弓矢というものを考えてみると、弓体と弦と矢の三つがないと成り立たないし機能しない。この弓矢が発明されるのは後期旧石器時代のことです。また、槍投げ機というものは槍と槍投げ機の二つが組み合わさって、はじめて一つの道具として機能するわけですね。それから石器にしても、それまでの石を手にもって打ちつける打製石器に柄がつき、柄と刃の部分とが一つの道具としてまとまるのはやはり後期旧石器時代です。つまり、この段階になって複数の構成部分を一つのものとして機能させることが定着したということが、物質文化のうえからも考えられます。そうすると、同じことが言葉でも言えるのではないでしょうか。そうであれば神話というのはこの時代にならなければ生まれないのではないかと考えられます。

（中略）

文化の歴史をずっとみると、何かある新しい技術が開発されると、最初の時期にこそそれを使った素晴らしいものができるのではないでしょうか。例えばトーキーなんてそうで、トーキーができたばかりの一九三〇年頃、いまに残るような名画がいくつもできたでしょう。それはせいぜい四〇年代ぐらいまでです。それからあとはつまらなくなってしまった。だから最初に新しい手段というか、メディウムができて感激し、それをフルに使って、いろんな試みをやってみる時期があると思うんです。

後期旧石器時代はまさに言葉というものが使えるようになった。採集狩猟民の場合だと、だいたい一日に三時間とか四時間とか、それぐらいしか働かない。あとは昼寝をしたり、おしゃべりするでしょう。そうすると、おしゃべりするということは、大変な機能を果たすのではないかと思うんです。

もちろんそのあとで発達するものもたくさんあるけれども、萌芽みたいなものは後期旧石器時代にあったのではないかと思うのです。僕はゲーテ流のモルフォロギー（形態学）、基礎になるものがあって、将来発達するものも萌芽状態ですでに存在し、それが顕現してくるという考えが好きなんです。ただその場合、偏った発達であったけど、やはり重要なのは、古代文明の段階で、やはり神官や司祭、まさにスペキュレーション、思弁をする。これはもちろん学問的に正しいことも中にはあるかもしれないけど、大部分はちゃんとした学問が発達してない段階なので、神話的な形でもって表現される。ですからやはり古代文明の段階の発達というのも、一つの大事なものだと思うのです。

これらの発言からも、大林は神話研究をおこなう際に、物質文化を意識しながら実施していたことが窺える。

奇しくも大林と同じく72歳で没した、国文学者・遠藤庄治（1934〜2006）の、調査に対する姿勢から、声なき民衆の口から発せられた伝承を正確に記録しようとすることと、考古学において、権力者の残した歴史的建造物だけでなく、なんの変哲もない土器片や石器のかけらをあますことなく発掘して、記録するという基本姿勢には共通性がある（後藤 2006）。このような資料の蓄積こそが、かつてアチックでも試みられたように、大きな理論を組み立てる際の、根拠となることは明白である。それは有形でも無形でも同様のことだ。

有形、無形の対象について、その分布をマッピングしていく手法は、現在では考古学でも神話学でも一般的なアプローチとなっている。大林による分布論は、それぞれ類型化された神話やモノの在り方を可視的に示したものであった。その行きつく先が文化クラスターであったのではなかろうか。大林が主導した文化クラスターとは、文化要素（「経済」「物質文化・技術」「社会・政治」「宗教・神話」「知識・芸術」の五つのカテゴリーに分類された343項目）の有無を元に民族間の類縁関係を樹状図で示すものであった。ここでも大林は文化要素の分布を重要視していたという（秋道 2001: 36）。

Ⅳ　分布図を考える

大林が神話を分布図として示す方法は、『葬制の起源』（大林 1977）の「海上他界の分布図」などで試み

られており[2]、後に『仮面と神話』（大林 1998a）で再び取り上げられる（図５～７）。仮面という有形の物質文化と無形の儀礼、祭りとの接点については、岡正雄も注目しており、東西の仮面を比較することも試みられていた（Sunami 2016）。

大林は『仮面と神話』（大林 1998a）について述べる中で、自身の分布図に対するこだわりを以下のように記している（大林 1998b: 93）。

私の民族学の一つの特徴は、問題となっている神話なり儀礼なりを、その分布を手掛かりにして、系統、所属する文化、意味などを考える行き方です。これは民族学では昔からある行き方ですが、私はこの方法が好きで、この『仮面と神話』に沢山の分布図が載っているのもそのためです。

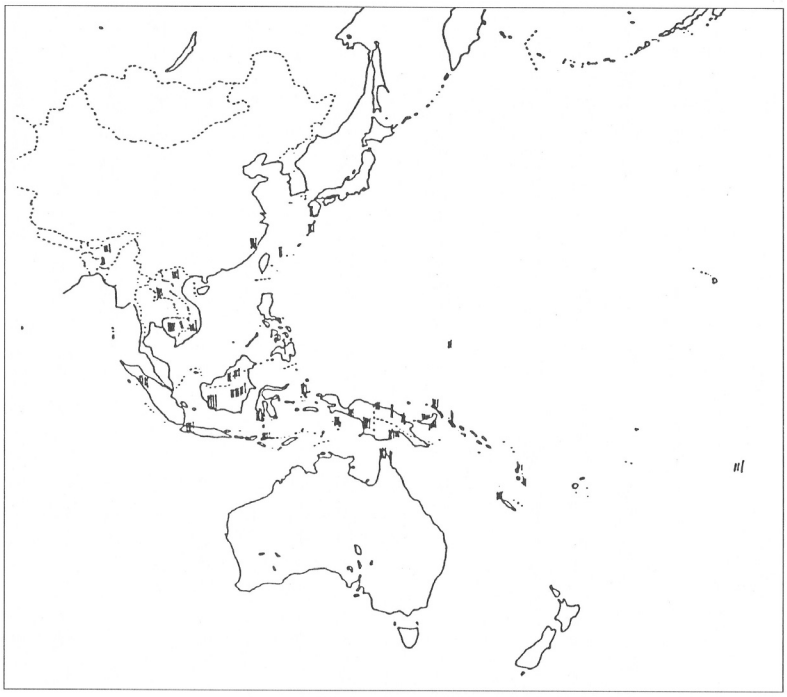
分布図からものを考える場合、一枚の分布図だけでも、いろいろなことを読み取ることができます。（中略）しかし、分布図の読み方でもっとも面白く、またもっと大事なのは、別々の特徴ではあっても、同じような分布状態をもつ複数の特徴の分布図を重ね合わせてみることです。そうしてそれらを貫いている共通の基本的な考えがあるのではないか、と考えてみることです。（中略）

よく書物の深い意味を読み取ることを、行間を読むと言います。それと同様に、分布図と分布図との間を読むことは、民族学の研究にとって、大変重要な、そして面白い問題なのです。

では大林が分布図を重要視するようになったのは、どのような経緯からだったのだろうか。研究史を紐解きながら検討を試みてみたい。

1900年、ベルリン民族誌博物館の先史部門長であったフォース（Voss, Albert 1837～1906）は、土器の特徴的な様式に着目し，型式分布地図を作成する研究に着手した（Voss 1900、図８）。この研究は，考古地理学的手法の先駆けとして位置付けられる（加藤 2008: 126）。本研究の特色は、それまでと異なり型式の示す文化的要素を単に年代学的指標として評価するに留まらず、領域・民族的同一性として理解するもので文化域の設定を目指すものであった。やがてこの手法はウィーンの民族誌学者たちにより推進されたことから「ウィーン文化史学派」と呼ばれている（トリッガー 2015）。

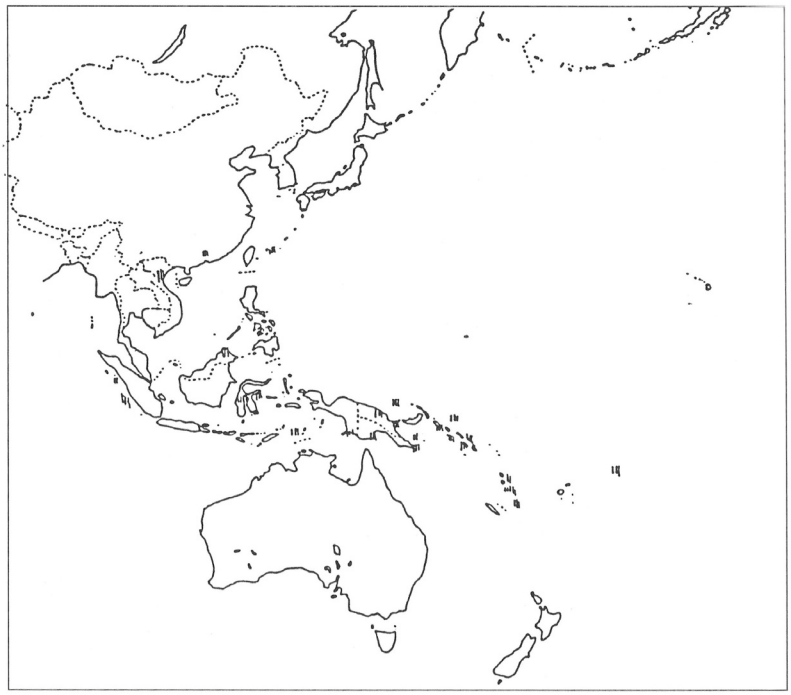
この地理学的手法を考古学へ導入し、直接考古学資



21　インド・太平洋地域の仮面の分布図（大林原図）

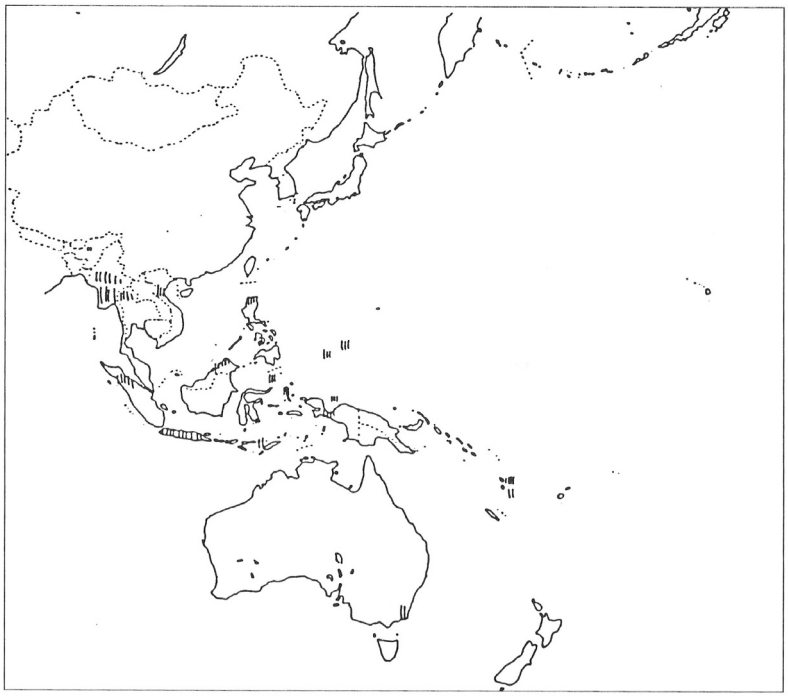
図５　インド・太平洋地域の仮面の分布図（大林 1998a）

2　1937から1939年ウィーン大学に留学した石田英一郎は、『桃太郎の母』所収「隠された太陽」の中で、「天岩戸神話要素の分布」の図を示している（石田 1956: 48）。



22　インド・太平洋地域の脱皮説話の分布図（大林原図）

図６　インド・太平洋地域の脱皮説話の分布図（大林 1998a）



23　インド・太平洋地域の羽衣説話の分布図（大林原図）

図７　インド・太平洋地域の羽衣説話の分布図（大林 1998a）

料をもって歴史的に民族同定をおこなうことに応用し、民族文化や民族領域の領域復元を積極的に推進したのは、ベルリン大学で教鞭をとっていた考古学者・コッシナ（Kossina, Gustaf 1858〜1931）である。コッシナの手法は,「住地考古学」と呼ばれる。このコッシナの考古学的手法は、やがてウィーン学派のメンギーン（Menghin, Oswald 1888〜1973）などによって1930年代により強い民族主義的様相を反映した研究

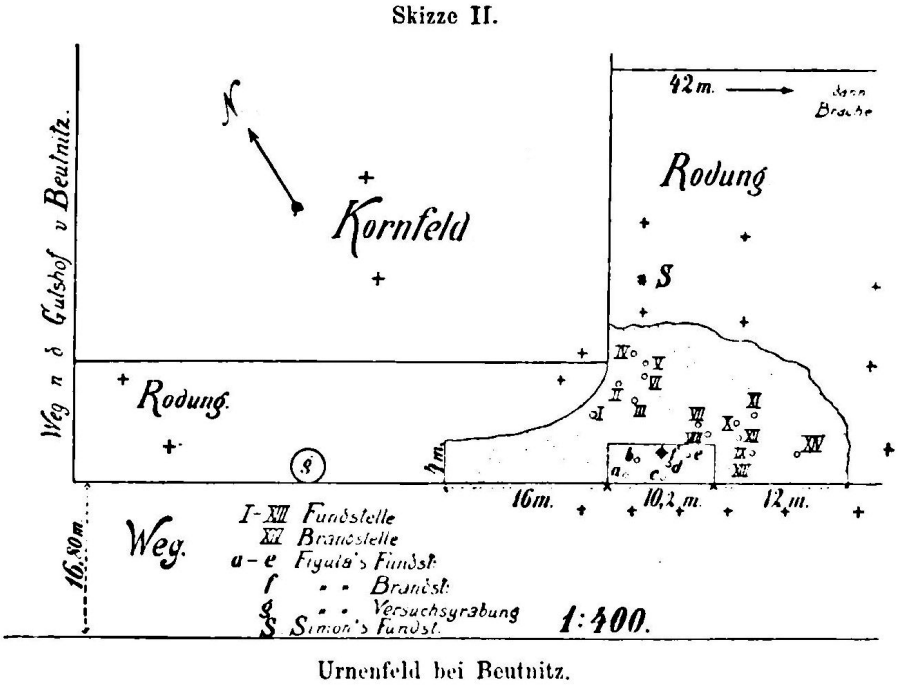


図８　土器の型式別分布図（Voss 1900）

へと引き継がれていった（加藤 2008: 126）。

コッシナによれば、スウェーデンの考古学者・モンテリウス（Montelius, Oscar 1843～1921）の方型式学的方法によって厳密に取り扱われた遺物の総体は、コッシナが先史学研究に導入したところの居住地理学の方法によって地図上に表現される必要があった。逆に言うならば、コッシナはこの地理学的な図化の方法による二次元的古物古跡分布図に、モンテリウスの古物編年方法を導入することによって時間軸を加え、これを先史時代の諸事象の共時的・静態的分布の表象という次元から、拡大や移動といった通時的・動態的表象の理解をも可能にする、より高い次元の分布図へと高めたのである（星野 2012: 237）。コッシナによるこの手法は「居住地考古学的方法」と呼ばれる。この方法で大きな役割を果たしたのは分布図である。コッシナは分布図を多用している（Kossinna 1914、コッシナ 2002、図９）。

ドイツの地理学者／民族学者・グレープナー（Graebnert, Fritz 1877～1934）から「文化圏」概念を受容して発展させ、「文化圏説」「文化史学派」と呼ばれる一大学派をウィーンで形成したのがシュミットである。ドイツ語圏ではまずグレープナーがこれを理論化し、シュミットが独自の体系を作りあげた。その際、グレープナーと並んでシュミットに強い影響を与えたのは、ドイツの民族学者／美術史家・グローセ（Grosse, Ernst 1862～1927）であった。すなわちグローセによれば、人類の経済形態は低級狩猟民、高級狩猟民、牧畜民、低級農耕民、高級農耕民の５つに分類できるという。シュミットはこうした経済形態と社会組織、さらに語族というほぼ３つの指標を用いながら、文化圏体系を構想した（山田 2018: 13）。

グレープナーは民族学における史料考証の方法を述べる中で、以下のように述べている（グレーブナー 1940: 16–17）。

> 即ち総ての物質的に創造されるべき文化の部分を、出来るだけ原形にて、或は次に確実なる模像に作り上げらるべきのみならず、土人の口から得られた総ての報告を、それが関係する限り、それが与へられてゐる形式に固定せねばならない。之は物質的対象について伝へられてゐる注意や説明、殊に伝統的域は宗教的種類の総ての報告、神話等に該当するものであるが、それらの絶対の科学的利用は非常に原文の再審査の可能性と関係してゐるのであつて、（以下略）

「解釈」（グレーブナー 1940: 95–96）

> 屢々――之は特に物質的文化の対象にあてはまる――ある現象の一般の意義は非常な困難なくしてその形式及び特性から現れるものである。手斧、槍、籠は概して其儘認識し得られるべきである。同様にニュー・ブリタニアのスルカ Sulka の夢の儀式は、

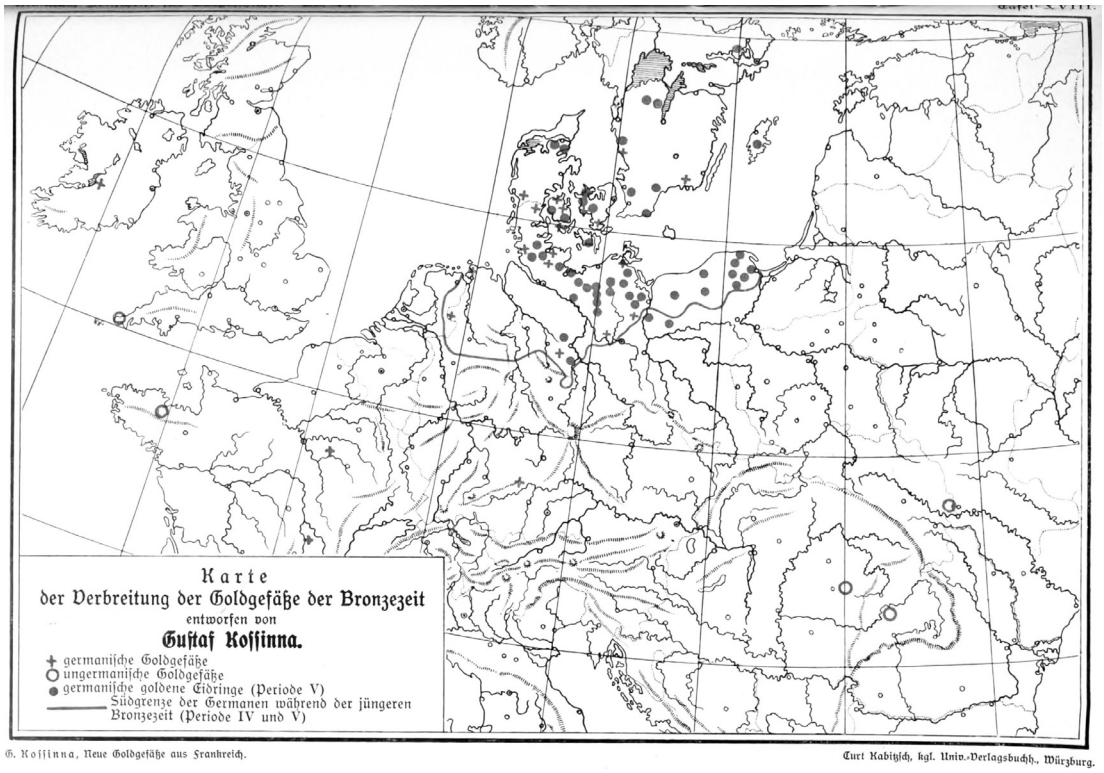


図９　青銅器時代の金製深鉢（Kossinna 1914）

そのものからして異論なく死者精霊の駆逐であること、またナリエリ Narriyeri の神話は太陽運行の陳述たることを示す。然し既に物質的文化の事実についても特殊化された応用の可能性が困難になる。常に木細工、多分ポート製造に使ふ手斧が田の鍬と、儀式用の槍が戦争及び狩猟用の槍と十分に区別されない。ブラジル或はインドネシヤのある箙形が只吹矢の為としてのみ使用されたとは当然考へられない。装飾された頭蓋骨はいつも或種の頭蓋骨礼典を意味するのであるが、然しそれだけでそれが死者崇拝或は人頭狩を取扱ふものとはいはれない。東から西への遍歴、また地下東への帰還を取扱ふ伝説は正しく一日神話であるが、精密な特徴を欠く場合、あくまで一定の星に関する結論はゆるされない。他の事物について一般的意義が決して予め明白ではない。槍の型、弓の型は屢々互に移動する――余は之については北アウストラリアの小さい槍を思ひ起すものである。西ニューギニヤのゲールビンクバイ Geelvinkbai 地方の肉又が近來屢々櫛であるとして考へられた。北方トゴ Togo のポケツト形の陰茎鞘 Penisfutterale は明白な材料の知識なくしては確定し難いものであることはフイコール・インヂヤン Huichol-Indian の糸十字架或は糸星と同様である。嚥下神話も、精密に説明された事実なくしては、少なくとも星の下降、雲による嚥下或は蝕たることを現し得ない。土人が一定の動物を食せず、或は一定の他人と誤られざる如き簡単な事実も、その意義は全然不明である。かかる意義に関して不確実な場合、ことに現象の全輻合が与へられず、また報告されずして、只その一部のみが与へられ、或は報告されている場合は、特に然りである。

また大林は「ヴィルヘルム・シュミットとその文化圏体系の成立過程」で、グレープナーとシュミットの関係について次のように述べている（大林 1967: 443）。

グレーブナーとアンカーマンが、有名な「オセアニアの文化圏と文化層」「アフリカの文化圏と文化層」の講演をしたのは、一九〇四年であり、印刷されたのは一九〇五年であるが、
(中略)
第四に、シュミットは、この「南米の文化圏と文化層においては、物質文化が形式学的研究に適しており、文化複合抽出の最初の手がかりとして重要なことを認めつつも、初期のグレーブナーやアンカーマンに見られた物質文化偏重を克服して、物質文化、社会覊織、神話に及ぶ、幅広い研究を展開したことも無視できない。これも、その後の彼の包括的な文

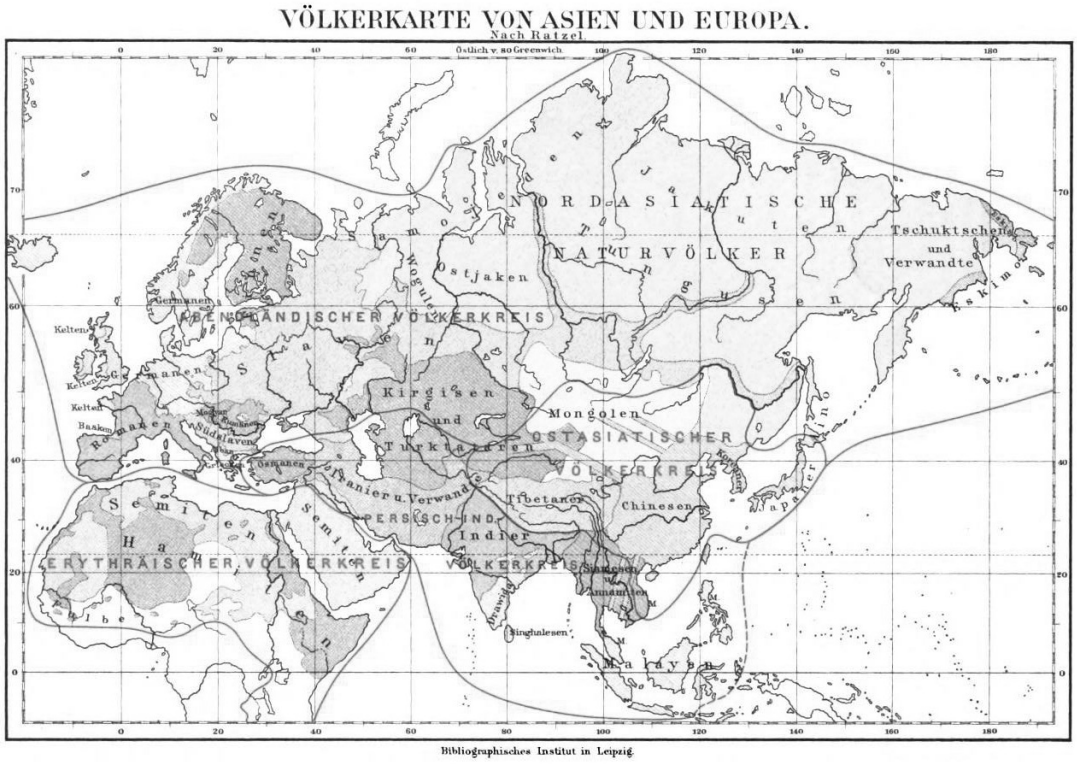
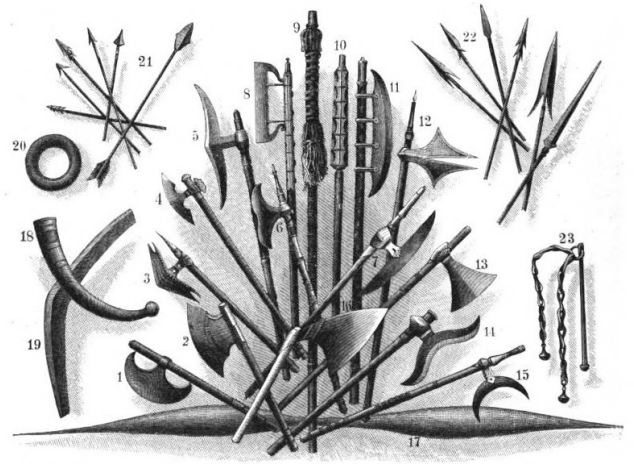


図10　アジア及びヨーロッパの文化地図（Ratzel 1895）

化圏体系の展開のための重要な基礎であった。

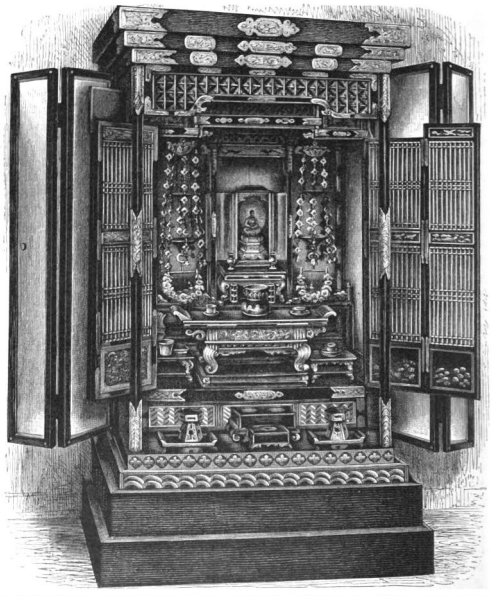
文化圏の人文地理学的研究はドイツのフリードリッヒ・ラッツェル（Ratzel, Friedrich 1844～1904）によって体系づけられた。ラッツェルの『Völkerkunde』(Ratzel 1894・1895）は、その一部「第二巻第二部第三篇　アジアの文化諸族」のみが日本語に翻訳をされている（ラッツェル 1943)。本書では、文化圏を可視化した「アジア及びヨーロッパの文化地図」が提示されている（図10)。一方で各地の物質文化についても多数図示されており、物質文化研究の側面も併せ持っている（図11・12)。

ドイツの民族学者・フロベニウス（Frobenius, Leo Viktor 1873～1938）の『Geographische Kulturkunde』(Frobenius 1904a）では、「アジア・アフリカの最も重要な送風機の種類」が図示され（図13)、「アジアとアフリカの鍛冶における鞴とバブルシリンダー諸型式



Indische Waffen: 1, 2, 4—8, 11—13, 15) Schlachtbeile von Chota Nagpur; 3) von Kattak; 9) Morgenstern von Indor; 10) Schlagstock von Tinnevelli; 14) Schlachtbeil von Vizianagram; 16) Schlachtbeil von Ganjam; 17) Bogen von den Andamanen; 18, 19) Wurfhölzer von Gutscherat; 20) Wurfwaffe aus Stahl („Quoit"); 21) Pfeile von Bergstämmen; 22) aus Kandesch; 23) Schlagketten von Vizianagram. (Nach Egerton.)

図11　インド人の武器（Ratzel 1895）



Ein buddhistischer Hausaltar aus Japan. (Ethnographisches Museum, München.) 1/15 wirkl. Größe. Vgl. Text, S. 721.

図12　日本の仏壇（Ratzel 1895）

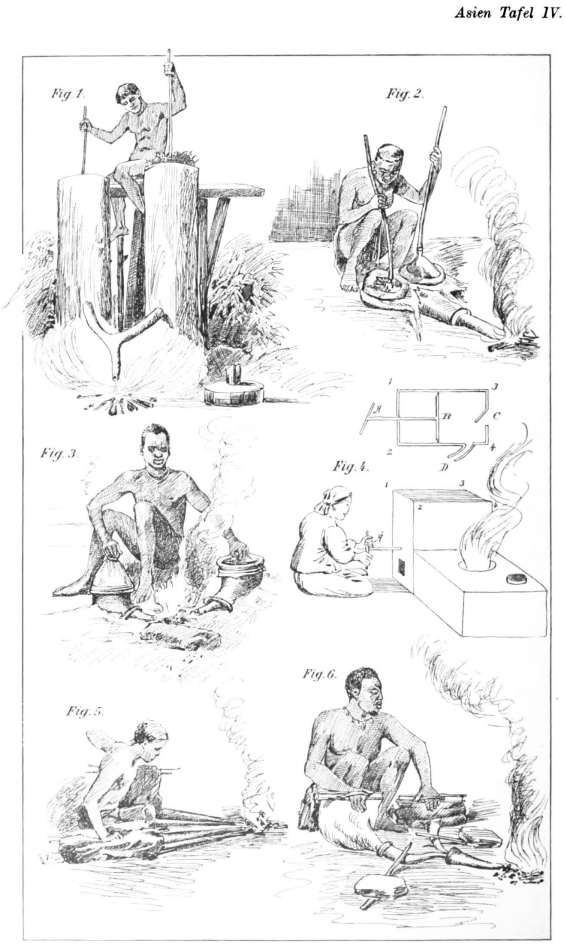


図13　アジア・アフリカの最も重要な送風機の種類
（Frobenius 1904a）

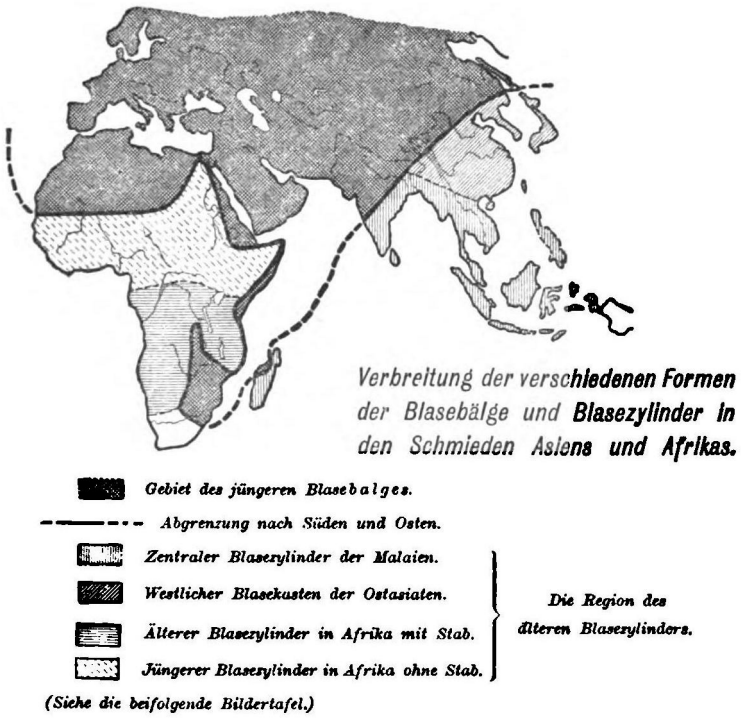


図14　アジアとアフリカの鍛冶における鞴とバブルシリンダー諸型式の分布
（Frobenius 1904a）

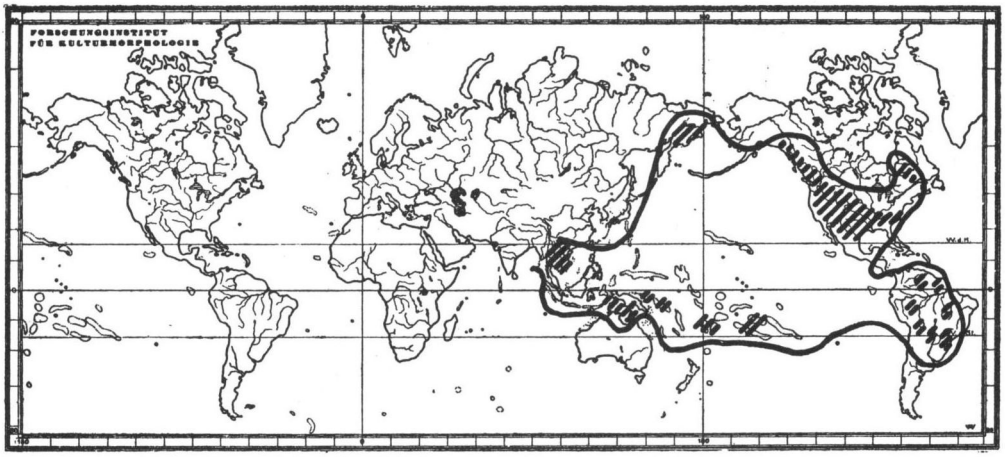
の分布」について分付図が提示された（図14）。本書では、物質文化を型式分類し、その分布を図として示すという手法がとられている。

『民族と文化』における、シュミットの理解を要約すると以下のようになる（シュミット・コッパース 1970: 98–100）。

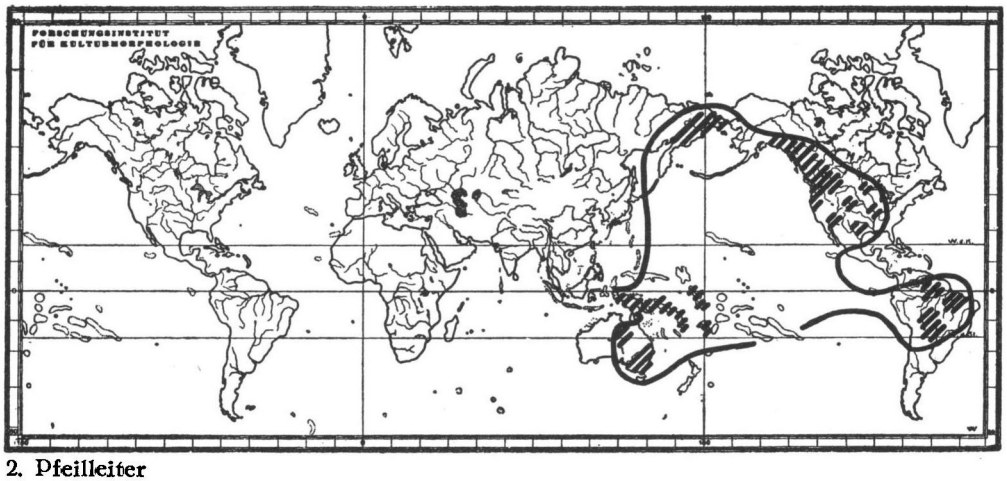
文化史学派が用いる標識として、形態基準と数量基準がある。グレーブナーは『民族学の方法』で、形態基準を次のように定義している。二つの事物の特徴が符合し、しかもこれらの特徴が事物の本性から必然的に来ているものでもなく、また（物質的文化財に関する場合）これに用いられる材料から来ているのでもない場合、ここに形態基準が成立する。これを説明する実例として、ラッツェルがはじめて用いた証例があげられる。ラッツェルはメラネシアのある弓とアフリカの弓の断面形態、編んで製作した環の弦受けと籐製の弦が一致することを発見した。これらの類似性は両民族が相互間に直接の関連を有していた時代に起因する。

数量基準とは、このような類似性が一つの事物について見られるだけでなく、様々な事物について見られる場合に成立する。フロベニウスは、この基準を用いてラッツェルの研究を拡充した。フロベニウスによれば、西アフリカとメラネシアには、先の同型の弓があるだけでなく、楯の形、家の形、仮面、植物繊維の被服、太鼓の形などにも、相互の類似性が認められるという。このように多数の類似性が生じたというのは、なおさらあり得ないことであるから、それはかつて両民族の間に存在した関連に起因するものだ、という結論が一層強められる。

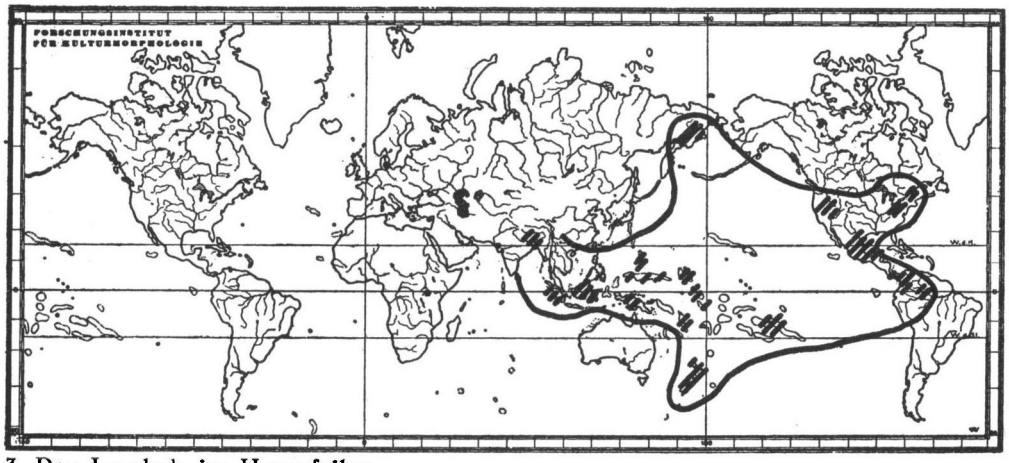
フロベニウスが開始した文化形態学（文化とは、生成・発展・衰退といったプロセスを有機的に経ながら形態を転々としてゆくような実体であり、個々の人間はそうした文化の遂げる運命の中で生きる存在に過ぎない）（山田 2018: 14–15）は、弟子のアーノルド・E・イエンゼン（Jensen, Adolf Ellegard 1899～1956）に継承された。大林が留学したフランクフルト大学で師事したのは、イエンゼン



1. Geboren nach dem Tode der Mutter



2. Pfeilleiter



3. Der Lausbub im Hauspfeiler

図15　世界の説話分布図（Frobenius 1938）

である。大林はいわばフロベニウスの孫弟子であった。

大林は『神話と神話学』中の「三　説話における東洋と西洋」において、フロベニウスの最晩年の論考で示された説話の分布図（Frobenius 1938、図15）を紹介している（大林 1975: 70、77）。

また、このような分布は何を意味しているのであろうか？　このような問題について、先駆的な研究を行ったのは、これはレオ・フロベニウスであるが。彼は、その晩年において、世界の説話中における（神話と伝説と昔話との間には、筋やモチーフが共通するものが少なくない。ここではまとめて説話と呼んでおく）東と西の対立を示すモチーフについて次のように論じている（本書七八―八四頁の分布図参照）。

（中略）

（34）以上は Frobenius 1938: 7–19. なお、フロベニウスのこの論文には、一切出典が省かれ、分布図に簡単な説明があるだけである。

このような神話・説話の分布図は、フロベニウスの代表的神話研究『Das Zeitalter des Sonnengottes』（Frobenius 1904b）には見られないが、同時期の『Geographische Kulturkunde』（Frobenius 1904a）には、物質文化の分布図が掲載されている。このことから、物質文化を類型化し分布図を示すという手法を、神話・説話を類型化し分布図にして示すことへと応用したのではないかと考えられる。いずれにしても、地理学の手法である分布図を民族学者／考古学者が応用し、物質文化や神話の諸類型の分布の差を視覚的に示すものとして、使用していったことは間違いないだろう。

V　おわりに

これまで見てきたように、大林太良が物質文化研究を実践した動機は、神話研究を相互補完するためであったといえよう。両者は、型式分類をおこないそれらの分布を図示して示すことにより、地域間での比較検討が可能となる。そのことに早くから大林は気づいていた。それは、ドイツ留学時にフロベニウスの研究に触発され、神話・説話に関する分布図を武器として使用した。フロベニウスは物質文化（民族資料）の分布図も用いて研究をおこなった。このことは間接的に大林にも影響を与えたと考えられる。考古資料については、神話研究と考古資料を扱った研究をおこなった、岡正雄、石田英一郎、松本信広、金関丈夫（1897〜1983）[3]ら先達がおり、大林が考古資料に惹かれるのも自然な流れであったろう。

大林がかつて嘆いたように、神話と物質文化の研究者は減少し、マイナーな分野となってしまった。大林が志向したモノそのものを類型化し比較するような物質文化研究は、現代的意義を失ってしまったのだろうか。筆者はそうは考えない。このようなスタイルの研究は、実際に物質文化と対面しデータを蓄積していくので、かなりめんどうで時間がかかる。そうして得られる成果は細やかなものである場合が多い。このような理由からか、ファストな研究でいくつもの業績を、短期間でまとめ上げアピールをしたい研究者は、敬遠するのかもしれない。しかし、スロースタイルで取り組む物質文化研究は確実に資料の情報を蓄積していくことができ、物質文化から世界の全体像を眺望することが可能となる。スローライフ、スローフードが称賛される時代、モノと向き合う物質文化研究のごときスロースタイルな研究が意味を成さないとは考え難い。手間暇かかりスローであるからこそ、持続することが肝要となるだろう。大林も含めた物質文化研究の先達たちの研究が、スローな研究を持続するために極めて重要であることになる。学説史研究はこれまでの「大きな理論」を正しく認識するために学ぶ必要がある。一方でスローな研究を実践する上では、「現場の理論」が必要とされる。両者が往還することにより、モノと向き合う物質文化研究が成立すると筆者は考える。

本稿のもととなったのは、2019年6月1日に東北大学で開催された、日本文化人類学会第53回研究大会での発表及び、2019年6月23日に南山大学で開催された、共同研究人類学・考古学の「大きな理論」と「現場の理論」2019年度第1回研究会での発表である。後者において、濱田琢司、後藤明の両先生には重要なご教示、ご指摘を賜った。また本稿の着想段階からたくさんのご教示をいただいた、山田仁史氏には改めて感謝の言葉を述べたい。

参照文献

（日本語文献）

秋道　智彌
2001　「大林学の中の文化クラスター」『民博通信』93：32–38。

有馬　真喜子
1979　「大林太良氏――東京大学教授（ひと）」『季刊人類学』10(4)：129–138。

石田　英一郎
1956　『桃太郎の母――比較民族学的論集』法政大学出版局。

牛島　巌
1972　「松本信広・三品彰英・岡正雄における日本神話研究」『国文学 解釈と鑑賞』37(1)：174–177。

大林　太良
1957　「アイヌ家屋の系統に関する一試論―― ketun-ni について」『民族学研究』21(4)：284–294。

3　大林は神話を含む金関の研究から影響を受けていることを述べている（角南 2021）。

1959 「アメリカ大陸の考古学と民族学——狩猟採集民諸文化について」『世界考古学大系15——アメリカ・オセアニア』石田英一郎、泉靖一（編）、pp. 161–168、平凡社。
1961 「比較先史文化論——円筒石斧文化をめぐって」『歴史教育』9(3)：41–47。
1963 「民族学から見た被服」『被服文化』84：8–14。
1967 「ヴィルヘルム・シュミットとその文化圏体系の成立過程」『一橋論叢』57(4)：43–63。
1969 「東南アジアにおける斧の着柄法」『物質文化』14：30–42。
1971a「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』2(2)：3–81。
1971b「先史社会組織復原の諸問題」『一橋論叢』66(2)：156–172。
1970 「西都原埴輪舟と海外の類例」『物質文化』16：11–17。
1972 「物質文化研究雑感」『物質文化』20：41–48。
1974 「ベトナム民主共和国における民族学、考古学研究の近況」『東南アジア史学会会報』22：2–5。
1975 『神話と神話学』大和書房。
1976a「コーカサスの巨人——神話との関係をみる」『朝日ジャーナル』18(26)：86–89。
1976b「文化人類学から考古学への提言」『古代学研究』80：33–37。
1977 『葬制の起源』角川書店。
1985 「人口減少と選択居住——縄文時代の社会組織再構成のための覚え書」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4：75–92。
1988a「あとがき（第一版）」『鍋と帽子と成人式——生活文化の発生』リップス（著）、pp. 278–283、八坂書房。
1988b「第二版あとがき」『鍋と帽子と成人式——生活文化の発生』リップス（著）、pp. 284–285、八坂書房。
1991 「シベリアのオンゴンからみた縄文土偶」『北奥古代文化』21：1–4。
1997 「人類文化史における口承文芸」『口承文芸研究』20：16–25。
1998a『仮面と神話』小学館。
1998b「分布図と分布図の間を読む——『仮面と神話』を語る」『本の窓』21(5)：92–93。

大林　太良、吉田　敦彦
1998 『世界の神話をどう読むか——徹底討議』青土社。

岡　正雄
1979 『異人その他——日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』言叢社。

加藤　博文
2008 「旧ソヴィエト考古学における民族起源論の系譜」『国立民族学博物館調査報告』78：111–134。

グローセ，エルンスト
1921 『芸術の始原』安藤弘（訳）、岩波書店（Grosse, Ernst 1894 Die Anfänge der Kunst J. C. B. Mohr）。

後藤　明
2006 「ことばの考古学——大林太良・遠藤庄治という二人の巨人の思い出から」『追悼 遠藤庄治』NPO法人沖縄伝承話資料センター（編）、pp. 50–53、NPO法人沖縄伝承話資料センター。
2007 「海人たちの起源は何処に」『ビオストーリー』8：56–63。

鹿野　忠雄
1946 『東南亜細亜民族学先史学研究』矢島書房。
1952 『東南亜細亜民族学先史学研究』2、矢島書房。

小杉　康
2011 「第4章　空間をよむ」『はじめて学ぶ考古学』小杉康、若狭徹、佐々木健一、朽木量、菱田哲郎（著）、pp. 75–99、有斐閣。

クライナー，ヨーゼフ
1979 「岡先生とヴィーン学説の裏づけ」『異人その他——日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』岡正雄（著）、pp. 53–480、言叢社。

グレーブナー，フリツツ
1940 『民族学研究法』小林秀雄（訳）、十字屋書店（Graebner, Fritz 1911 *Methode der Ethnologie* C. Winter）。

コッシナ，グスタフ
2002 「ゲルマン人の起源」『レスキス・フィロソフィーク』星野達雄（訳）、14：115–158（Kossinna, Gustaf 1911 *Die Herkunft der Germanen; zur methode der Siedlungsarchäologie* C. Kabitzsch）。

佐々木　史郎
2011 「フォーラム化する文化人類学——大学共同利用機関としての国立民族学博物館が果たすべき役割を考える」『民博通信』134：2–7。
2018 「大林太良」『はじめて学ぶ文化人類学——人物・古典・名著からの誘い』岸上伸啓（編）、pp. 64–65、ミネルヴァ書房。

佐々木　髙明、クライナー，ヨーゼフ、秋道　智彌、小長谷　有紀
2007 「偉大なる歴史民族学者、大林太良」『ビオストーリー』8：7–23。

シュミット，ヴィルヘルム、コッパース，ヴィルヘルム
1970 『民族と文化』上、大野俊一（訳）、河出書房新社（Schmidt, Wilhelm • Koppers, Wilhelm 1924 *Völker und Kulturen: Gesellschaft und Wirtschaft der Völker, I* J. Habbel）。

末永　雅雄、三品　彰英、横田　健一
1973 『神話と考古学の間』創元社。

角南　聡一郎
2021 「相棒との対話——金関丈夫先生をめぐる四方山話より」『台湾原住民研究』25：233–242。

高谷　紀夫
2003 「民族学者　大林太良」『社会人類学年報』29：135–148。

トリッガー，ブルース G.
2015 『考古学的思考の歴史』下垣仁志（訳）、同成社（Trigger, Bruce G. 2006 *A History of Archaeological Thought 2nd Edition* Cambridge University Press）。
星野　達雄
2012 『グスタフ・コッシナ研究』レスキス企画。
ラッツェル，F.
1943 『アジア民族誌』向坂逸郎（訳）、生活社。
リップス，J. E.
1988 『鍋と帽子と成人式――生活文化の発生』大林太良、長島信弘（訳）、八坂書房（Lips, Julius E. 1947 *The Origin of Things* A. A. Wyn, Inc.）。
山田　仁史
2007 「大林太良の仕事――著作の森を歩く」『ビオストーリー』8：72–81。
2017 『新・神話学入門』朝倉書店。
2018 「ヴィルヘルム・シュミット」『はじめて学ぶ文化人類学――人物・古典・名著からの誘い』岸上伸啓（編）、pp. 9–15、ミネルヴァ書房。
2020 「ドイツ語圏人類学におけるP・W・シュミット」『人類研の歩みと人類学の未来――南山大学人類学研究所設立70周年記念シンポジウム講演録』南山大学人類学研究所編、pp. 7–20、南山大学人類学研究所。
横山　廣子
2001 「大林先生のこと」『民博通信』93：19–31。

（英語文献）
Sunami, Soichiro
2016 Sutudies on Material Culture by Oka Masao *Origins of Oka Masao's Anthropological Scholarship*. pp. 197–214. Bonn：Bier'sche Verlagsanstalt.

（独語文献）
Frobenius, Leo
1904a *Geographische Kulturkunde: eine Darstellung der Beziehungen zwischen der Erde und der Kultur nach älteren und neueren Reiseberichten zur Belebung des geographischen Unterrichts, 1•2*. Leipzig: F. Brandstetter.
1904b *Das zeitalter des sonnengottes, 1*. Berlin: Walter De Gruyter Incorporated.
1938 Das Archiv für Folkloristik *Paideuma* 1(1): 1–19.
Kossinna, Gustaf
1914 Neue Goldgefäße aus Frankreich mit einem Anhang : Herr Schuchhardt und die Wahrheit. *Mannus-Verlag* 6: 295–308.
Ratzel, Friedrich
1894 *Völkerkunde*. Leipzig: Bibliographisches Institut.
1895 *Völkerkunde 2*. Leipzig: Bibliographisches Institut.
Voss, A.
1900 den Urnen – Friedhof bei Beutnitz, Kr. Crossen a. 0. *Verhandlungen der Berliner Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte*. pp. 367–375. Berlin: Verlag Von A. Asher & Co.

図版典拠

図1　大林 1969、図2～4　大林 1970、図5～7　大林 1998a、図8　Voss 1900、図9　Kossinna 1914、図10～12 Ratzel 1895、図13・14　Frobenius 1904a、図15　Frobenius 1938

Material Culture Studies by Taryō Obayashi

Soichiro SUNAMI*

Taryō Obayashi is known as an ethnologist / cultural anthropologist who has made outstanding achievements in the field of mythology. However, what is not well known is that one of Obayashi's research themes was material culture studies. Looking at the achievements, it can be seen that most of Obayashi's material culture studies were on archaeological materials, but ethnic materials are also being examined in relation to archaeological materials. This research on intangible myths and material culture research is based on the discussions and dialogues left by Obayashi and the remarks of Obayashi's disciples on the question of what kind of connection they had in Obayashi. We examined the problem.

It can be said that Taryō Obayashi's motive for practicing material culture research was to complement each other's mythological research. By classifying the types and showing their distribution in a diagram, both can be compared and examined between regions. Obayashi was aware of that from early on. Inspired by Frobenius' research when studying in Germany, it used a distribution map of myths and narratives as a weapon. Frobenius also conducted research using a distribution map of material culture (ethnic data). This is thought to have indirectly affected Obayashi.

Keywords

Taryō Obayashi, material culture studies, mythology study, distribution map, History of theory

* Kanagawa University